



東邦大佐倉だより

第2号(2004.12.1)

自然・生命・人間

東邦大学 学祖 額田 晋・著「自然 生命 人間」より

東邦大学佐倉病院の基本理念

質の高い医療を安全に提供できる病院
地域に貢献する病院
人間愛を共有できる病院
楽しく明るくチャレンジする病院

〒285-8741 千葉県佐倉市下志津564番地1 東邦大学医学部附属佐倉病院 日本医療機能評価機構認定病院
TEL 043-462-8811 (代) FAX 043-462-8820 (代) URL: http://www.sakura.med.toho-u.ac.jp 発行/広報委員会

Topix News

当院の向かうところ /

副院長 白井 厚治

東邦大学佐倉病院広報誌に
よせて /

八千代市医師会長

杉岡 昌明

部署紹介

糖尿病・内分泌・代謝セン
ター

放射線科・中央放射線部

活動

CPC 活動と研修医

患者様支援コーナー

病院フォーラム

ご案内・情報

安全管理室の設立

佐倉病院Q & A

携帯電話の使用禁止

Topix News

当院の向かうところ

副院長 白井 厚治

東邦佐倉病院の受付正面左の一角に、学祖額田晋先生の言葉が描かれています。「静かに自分の心を自然の偉大な力に通わせながら、人間として生きるだけ生き、そして、社会のため人類のため働けるだけ働いてみようではないか」と。この言葉に触れたとき、本学に奉職した誇りと勇気がわいてきたことを今でも覚えています。今後の佐倉病院のすすむべき道の究極は、この額田先生の言葉の具現化に尽きるように思います。即ち、「病気」という大自然があたえた難問に正対し、生命を尊び、若い学徒らと共に、自らの医学を究め、技能を研鑽する者たちの歩む軌跡で描かれてゆくと思います。

佐倉病院は、増床をし、いよいよ内容充実期を迎えます。しかし、医学そのものはまだ未発達であり、人々の高齢化と共に疾病もまた速いスピードで重症・複雑化していきます。これには病院側は全部署、全スタッフが丸となってみてゆく姿勢と、各部門の精鋭化の2面からのアプローチが必要です。加えて安全は絶対的条件ですが、患者さんも含め、互いに何でも言い合える雰囲気づくりが大切で、これらの実現にむけ佐倉病院は努めてまいります。

本誌発刊が、東邦大学佐倉病院の透明性が増し、皆さんに病院の有り様が一層ご理解いただけることに加え、病気との闘いについてもヒントが得られればと願っています。



Topix News

東邦大学佐倉病院広報誌によせて

八千代市医師会長 杉岡 昌明
(東邦大学医学部附属佐倉病院 研修管理委員)



地域医療連携の広報誌<東邦大佐倉だより>時宜をえた発刊、歓迎いたします。平成3年9月、貴院開院以来、公私ともに患者さんの紹介、研修会、講演会などへの参加で親しくさせて頂き感謝しております。平成7年11月に、東邦大学佐倉病院・八千代市医師会連絡協議会を立ち上げ今日まで14回を数え、患者さん本位の医療連携、機能分担を中心に様々な課題について親密なる意見、情報交換をする場として実績を上げています。

八千代市医師会会員の紹介率が全紹介の20%以上を占め、救急車患者搬送の15%、入院患者さんの20%が八千代市民である実績より病診連携の成果と評価しています。機能分担として、医学部5年次生の地域立脚型医療(CBM)院外実習を担当させていただき、来年度から、卒後新臨床研修協力施設(地域保健/医療)として登録し少しでも平素の病診連携の恩返しが出来ればと考えております。

糖尿病・内分泌・代謝センター

糖尿病・内分泌・代謝センター 内科講師 宮下 洋

～ヘルスケアファイルを用いた患者指導システム～

「健康日本 21」の平成 14 年糖尿病実態調査では、現在治療中の人も含めて糖尿病が強く疑われる人は全国で約 740 万人（9.0%）、可能性を否定できない人（10.6%）を合わせると約 1620 万人（19.6%）にのぼると報告されています。この頻度を南印旛地区に当てはめると、佐倉市（17 万人）、八千代市（17 万人）、四街道市（8 万人）合計で約 3.7 万人が、「糖尿病が強く疑われる人」にあたる事になります。「糖尿病の可能性を否定できない人」を含めると約 8.2 万人になる計算になります。

糖尿病は、遺伝の病気と言われましたが、最近では決してそうではありません。その背景には、いわゆる「ペットボトル症候群」に代表されるように、過剰な食事摂取や偏った食事、運動不足があることはいまでもありません。

糖尿病に加え、高血圧や肥満、高脂血症といったいわゆる生活習慣病は、その字のごとく多くは生活習慣の乱れからくるものであり、それを改善しなくては、十分な効果は望めません。治療への第一歩は、患者さん本人が、病状を理解し、生活習慣の改善の必要性を感じることを考えます。それに役立つ事を目的として、当センターでは、ヘルスケアファイルを用いた患者指導を行っています。ヘルスケアファイルとは、血液データや体重などをグラフ化して記入するもので、原則として患者さん全員に渡しています。患者さんには、毎日の体重測定をし、ファイルに記入してもらいます。受診の際には、まず看護師が当日の体重をチェックしたのちに血液データを記入します。血糖やコレステロール、中性脂肪の変化と体重変動を見ながら、生活指導を行います。次に、医師の診察となります。ここでもファイルを見ながら、病状を説明、内服処方追加・変更などファイルに書き込みます。その後医師が必要と判断すれば、栄養士による栄養指導を行います。ここでは、ヘルスケアファイルに加え、当院で作成した食品分類表を用いて、食材や調理法などをわかりやすく指導しています。各指導のポイントはファイルに記載され、血液データも患者さんが持ち帰るため、患者さんは現在の自分の状況を把握しやすくなり、また医療スタッフの指導も手元に残ることになります。実際、ヘルスケアファイル作成当時、ファイル使用者と未使用者とでは、使用した群の方が糖尿病の血糖コントロールが良好で、逆に未使用の群の方が通院をやめてしまう患者さんの割合が多かったことから、全面的にファイルを導入することになったという経緯があります。またこのファイルは地域医療連携システムを行ううえでも活用されています。地元の開業の先生がたと、このファイルを通して患者さんの情報のやりとりを行っています。今後さらなる普及に努め、理想的な地域医療連携システムを築くことを目標としています。

以上のように当センターでは、境界型をふくめた糖尿病だけでなく、高脂血症や肥満症の治療を行っています。生活習慣病は、患者ご本人が日頃の生活のなかで、中止していかなければならない点が多く、薬の処方だけでなく、患者指導という点に重きをおいて診療をおこなっています。

当センターでは、目的別に期間を限定した入院プログラムも実施しています。2 週間で糖尿病についての講義と合併症の精査を行うもの、肥満の患者さんには土日で睡眠時無呼吸症候群の有無や内臓脂肪量を検査する入院、インスリンを一週間で習得する目的の入院などを行っています。また、近隣の開業医の先生方とともに、年に 1 回「印旛糖尿病研究会」を当院にて実施し、糖尿病に対する南印旛地区全体としての糖尿病治療の向上にも努めています。患者 医療者間のパートナーシップの向上が求められています。これからもヘルスケアファイルを用いた患者指導システムを広げながら、生活指導を中心とした患者さんに分かりやすい医療の実現に努めていきたいと考えています。



看護指導風景

放射線科・中央放射線部

放射線科・中央放射線部 部長 野口 雅裕

佐倉病院放射線科は中央放射線部の高度医療機器を用い、X線CT検査、MRI検査、核医学検査（RI）および放射線科に依頼のあった血管造影検査を放射線科医 3 名、そして中央放射線部の技師諸兄および看護師とともにこなしています。検査はほとんどすべての臨床各科から主治医より依頼を受け、外来・病棟患者様を対象に行なっております。依頼票に基づき、症例ごとに最善の情報が得られるよう熟考し、検査を行ない、報告書（レポート）を作成し、また副作用が出現しないよう、患者様に検査前に問診を施行し、いままで大過なくやってこられました。

また平成 13 年からは院外の他の医療施設よりの検査（CT, MRI, RI）のみのオーダーに対し、医療連携室を通し検査の依頼を受け、地域に開かれた診療科としても機能しております。あいにく放射線治療機器の設置はありませんので、放射線治療に関しましては、近郊の放射線医学総合研究所（放医研）成田赤十字病院、千葉県がんセンター、千葉大学医学部附属病院あるいは柏の国立がんセンター東病院へお願いしております。また開院以来、成田赤十字病院および日本医科大学付属千葉北総病院さらに神崎クリニック、矢野医院の放射線科医を含む地域医療で活躍されておられる諸先生方と「印旛フィルム・カンファランス」を年 4 回持ちまわりで挙行し、今秋にはすでに第 46 回目を迎え、印旛地区の放射線診療の要となるよう友好と協調の絆を深めてまいりました。カンファランスにご興味のある先生方がおられましたら、ご相談下さい。中央放射線部の技師諸兄は上記の放射線科と関連ある業務以外に、一般撮影、断層撮影、消化管をはじめとする各種造影検査、マンモグラフィ等に従事し、さらには血管造影検査（心カテも含め）に加わり、緊急時にはオンコール体制で深夜でも来院し、その重責を全うしております。また当直業務も少ない人数でこなし、当直明けには直ちに帰れる人も少なく、お互い助け合いながら、この大変な十年あまりを乗り越えてきました。臨床各科の先生方からの評価も高いものがあります。今後は増員をはかり、皆の疲労困憊を改善する施策が望まれます。

佐倉病院はオープンして早 10 年以上が経ち、当時新しかった機器類も老朽化の道は避けて通れず、随時新規導入更新をはかりつつ、時代に迎合した最善の医療を皆様に提供したいと考え、近い将来の増床時には最新鋭の機器類で、迅速に、安全に患者様にとって有益な情報を提供する環境づくりが急務と考えています。また核医学検査も大きな変換点に来ており、皆様ご存知のように PET が脚光を浴び、来年にはサイクロトロンなしに、短半減期の放射性医薬品の ^{18}F -FDG が供給（デリバリー）可能となり、早期の癌の発見あるいは再発癌の早期診断に大きな威力を発揮するとされ、当院でも PET/CT の早期導入が期待されています。時々刻々急速に変化するこの時代の流れについていくには、われわれ医師はじめ技師も絶えず勉強し、修得し、患者様の力になれるよう日々切磋琢磨せねばならぬ放射線科・中央放射線部と痛感している今日です。どうか皆様、宜しくご指導ご支援賜りますようお願い申し上げます。



CT 装置



MRI 装置



RI 装置

活動

C P C 活動と研修医

病院病理部 部長 亀田典章

Clinico-Pathological Conference (CPC, 臨床病理検討会) とは、主として入院中の患者様が不幸にも病気で亡くなられ、病理解剖をさせていただいた場合に、生前の診断が正しかったか、発見されていない病気はなかったか、治療法は妥当であったか、何が死因になったのかなどを検証し、臨床医と病理医との間で議論を交わす検討会です。当院の CPC は開放的な点が特徴的で、院内すべての職員が討論に参加でき、医師会の先生方にも出席していただき、また、専門家をお招きして討論への参加と講演をお願いすることもあります。

新医師臨床研修制度では、剖検症例の提示とそれに基づいた CPC レポートの提出が必修項目に挙げられており、当院においては、病理医の指導下に研修医自らが、学修することを義務づけました。病院 CPC とともに研修医のための CPC も教育上重要な位置付けにあります。

厚生労働省が新制度のなかで求めていることの 1 つに“患者や家族との間で十分なコミュニケーションがとれる医師の養成”があります。コミュニケーションがとれない医師では解剖の許可はいただけません。また、剖検診断に際しては、病態をすべての臓器・組織の相関として把握し、死因を総合的な見地から判断することが求められます。CPC の場では診断結果を正確に伝達し聞き手の理解を得るといった発表能力が試されます。病理解剖から CPC に至るプロセスをきちんと体験することによって、“チーム医療の実践と自己の臨床能力向上に不可欠な能力”の習得につながるものと確信しています。



CPC 風景

病院フォーラム「患者中心の医療をめざして」を行って (平成 16 年 7 月 16 日実施)

院内教育委員長 館野昭彦

今年度は、伊藤病院長もキーワードとして掲げる「医療連携の充実」をテーマにフォーラムを開催しました。NHK 開設委員の飯野奈津子先生を講師としてお招きし、患者中心の医療連携について講演していただきました。医師会の先生方も多数参加されており、活発な討論が展開され、有意義なフォーラムでありました。また、医療サイドと患者様を中心とした受療サイドの視点の相違についても考えさせられた機会でもありました。



講師 飯野奈津子先生



安全管理室の設立

安全管理副室長 田辺 恵美子

東邦大学佐倉病院では、平成 12 年から安全管理体制を導入・整備してきましたが、今年 7 月に専門的に管理する医療安全管理室を設置いたしました。患者様の安全を確保するためにシステムも一部変更し、縦系列として安全管理委員会(診療責任者中心)、医局・部署安全管理検討会(各医局・部署中心)、安全管理研修会(全職員対象)を配置し、横系列としては職場合同リスクマネージャー会を配置し、万全を期しています。毎月開催される安全管理研修会は、事例の紹介・分析・改善のための対策などの発表が行われる、全職員による自主的な検討会でもあります。活発な討論や出席率の向上は職員の安全管理に対する認識の表れと自負しております。また、佐倉病院の安全管理指針(1:安全の確保 2:病態の把握 3:二重チェック 4:報告・連絡・相談)のもとに更なる向上を目指し、安全管理対策マニュアル第 4 版を改訂しました。職員の皆さんは、精読の上、活用をお願いします。

医療安全管理室は、今後も佐倉病院に来院・入院される患者様の安全性を確保すべく中心的活動を行ってまいります。多面からのご指導・ご協力をお願いいたします。

～ 佐倉病院 Q & A ～

「携帯電話の使用禁止」

携帯電話や PHS につきましては、その使用により、院内の電子医療機器等に誤作動などの悪影響を引き起こす可能性がありますので、当院においては、通話やメールを含め、院内での使用を一切禁止いたしております。もし、お持ちになられている方がいましたら、必ず電源を OFF にしておくようご協力をお願い致します。